

ルドルフ・シュタイナー

ルドルフ・シュタイナー (独: Rudolf Steiner) は、1861年ハンガリー生まれのオーストリア人。オーストリアで少年期、青年期を過ごし、ウィーン工科大学で在学中にゲーテの自然科学を研究する機会に恵まれ、神秘学の教えを受ける機会を得る。20代でゲーテ研究者として世間の注目を浴びた。30歳で哲学の博士号を取得、哲学書を著したり、ベルリンで雑誌の編集をしたりしていき、その中で様々な思想を発表していく。



40歳から神智学運動に関わるようになり、神智学徒たちの集まりで講演を行うようになった。

その後、神智学協会ドイツ支部の事務総長になり、秘教的な内容の講義を次々で行うようになる。やがて神智学協会より離れて、独自の精神科学、人智学 (アントロポゾフィー) のグループを形成。さらにそれを基盤とした芸術論、社会論、教育論、医学、農学へと活動を展開していった。

人智学について多くの著作を物し、物質世界を超えた超感覚的世界 (精神界) に関する事柄を語った。その思想の詳細は、ヨーロッパ各地で行われた生涯 6 千回にも及ぶ講演を通じて明らかにされている。シュタイナーは宇宙の精神と結び付いた人間の内なる霊性についての認識の基礎づけを図り、また、近代社会の諸問題の克服に向けた調和への道筋を探った。

現在知られているバイオダイナミック農法はシュタイナーが提唱したものであり、ヴェレダ社のコスメなどはこの人智学の視点からの医学を中心としているなど、世界のあらゆる分野でその功績が活かされています。(出典: ウィキペディア)

シュタイナー教育 (ヴァルドルフ教育)

シュタイナーが提唱した「教育芸術」(独: Erziehungskunst) としての教育思想および実践であるヴァルドルフ教育を、日本で紹介する際に名付けられた呼称の一つである。

シュタイナー教育では、教育という営みは、子供が「自由な自己決定」を行うことができる「人間」となるための「出産補助」であるという意味で「一つの芸術」であると考えられている。その思想と実践は、シュタイナーが創設した、人間が自らの叡智で人間であることを見出すという神秘的学説・人智学 (アントロポゾフィー) によって支えられている。

独自のシステムで養成された教師により行われ、教員の法的立場は国や修了した養成組織によりそれぞれ異なっている。カリキュラムや授業内容も公的なものとは異なっており、独特の芸術教育などが知られる。

1919年にドイツ南部ヴェルテンベルク州シュトゥットガルトに初めて学校が開かれた。第二次世界大戦後にその数を増やし、20世紀末時点、世界全体で約780校の姉妹校がある。

日本で学校法人として認可されているシュタイナー学校は、学校法人藤野シュタイナー学園 初等部・中等部・高等部(神奈川県相模原市)と、学校法人北海道シュタイナー学園(いずみの学校)(北海道虻田郡豊浦町)。そのほかにもNPO法人のシュタイナー学校などが全国にある。シュタイナー学校は発祥の地ドイツで最も数が多く、次いでアメリカが多い。

シュタイナーの死後、障害児の支援を長年行って高く評価されており、イギリスのキャンプヒル共同体及び関連する活動(キャンプヒル運動)では、学習障害を持つ人々に生涯にわたるケアを行っている。国家が教育を独占していたドイツで私学・代替学校の可能性を切り開き、教育を豊かにすることに貢献した。(出典: ウィキペディア)

人智学(アントロポゾフィー)

シュタイナーが自らの精神科学を名付けたもの。人智学とは、人間存在の中の精神を宇宙の精神へと導く道、もしくは人間の中の高次の自己が生み出した叡智だ、と説明している。またアントロポゾフィーは「人間の知恵」ではなく「人間であることの意識」だと述べている。人智学の内容は、人間の分析、精神世界諸領域の探究、死生観、宇宙進化論、修業論から成る。

精神科学

シュタイナーが創始した、自然科学の方法で精神世界を探究する学問。= 霊学、人智学

エーテル体

生命力、形成力体とも言う。物質器官を構築する力体。7歳までは物質的身体構築のために働き、外的な印象にのみ開かれる。

人間を構成する部分の一つであるエーテル体は、生きている間生命体の物質的身体の崩壊に対して戦っている。この力は植物と共有している。またエーテル体は栄養摂取や生殖に仕える器官を作る。このような生きることを可能にする部分を有するのがエーテル体である。

アストラル体

人間の思いの担い手である心のこと。快と苦、欲望、衝動、情熱など、心魂の営み全ての担い手。

この力は動物と共有している。アストラル体は神経組織を作る。

神経を構築し、神経はアストラル体を物質的に表している。

アストラル体は受胎によって、物質的身体とエーテル体の元基が準備された後に組み込まれる(受胎後7ヶ月以後)。

動物的欲望の部分と、人間自身が働きかけた部分とに分かれる。

自我 (個我)

個我の担い手、自己意識の担い手。これにより人間は地上のもの全てを凌駕する。植物、動物とも共有しない唯一のもの。血液系、循環器系と結び付いており、血は個我の物質的表現であると言われる。

自由、内なる神聖への原基であると同時に、自己の内に硬化する原因でもある。